

# 守護神 ゴーレス

第5話  
『プライド』  
DON'T LEAVE ME NOW

作:みかつきなお

守護神ゴーレス第5話『プライド』

Don't leave me now

「はーやー！ わじわじーするー（腹が立つ）。警察おそ  
ーい。でかいアクチュエーター來たっていったのにー」

小夜子は警察や県庁やらあちこちに電話をかけて、ここ  
の非常事態に無関心なのに腹が立っていた。裕一も策を考  
えてみた。

「これはネットでSOSを呼んでみるか。マスコミが一番い  
いだろ」

「だけど、みずきーよ、どうするねー」

「早く戻さんといかんけど、みずきの顔にモザイクかける  
か」

「それ、なんか悪いことやつてる感じ」

「だからよー。あんなところにいたら普通フリムンと思う  
あらに（普通馬鹿と思うだろうな）。でもあの技は効いて  
いるんだ。クナトの術は前に進む気をなくす技だからよー」

「でも、早く戻らんとなんか怖いよ」

小夜子は各動画サイトに監視カメラ画像を送信して、そ

のリンクを張ったメールをマスコミなどに配布した。

辰巳と小雪、桜は工場の入り口に立つた。

桜は先ほどの訪問であけられなかつた関係者以外立ち入  
り禁止のドアの向こうをみた。

桜の目に巨大なアクチュエーターマシンが膝を曲げて鎮  
座し、そして数台のキャビネットを中心とした『ウムイ』  
システムの全体が見渡された。

「大きい……。予想以上だわ」

「そう。あの機体がゴーレス。そしてこのユニットが擬似  
生体CPU『ウムイ』よ」

桜はコントロールームの左手にある直径80cmの球  
体に目が行った。

「やはり……。この中型用の神経培地、結構費用と増殖  
させる時間が必要じゃないの」

「うん。また後でね。お互いの秘密を語らないと話が進ま  
ないと思うから。今は見て欲しい」

「わかつたわ。」

小雪はこのシステムのこれまでを語るにはまだ早いと思  
つた。桜はパイプ椅子に座り彼らの作業を見守つた。

一方浦添埠頭の特設会場では5体の大型アクチュエータ

一機がステージを囲み観客を見下ろす中、午後2時の新作発表会の開会を間近にしていた。客席には来賓と抽選に当たつた一般観客2000人、そして港湾区域のフェンスの外には抽選に漏れたアクチュエーターファン達がカメラを構えていた。

舞台の袖で控えていた桐江と兼光はビーチの客が偶然取つて公開された昨夜のゴーレスの動作テストの画像をチェックしていた。

「ほう、参ったねえ。百名ビーチに大型アクターが動いている画像。桐江ちゃん、問題の画面に似ているよ。あれは橋製作所のものではなかったのかね。葦原小雪、あの女がやらかしたのか？」 知つてただろお前」「本番前です。雑念を取り払ってください。回りに気がつかれます。いつもの兼光スマイルはどうしたのですか」 「あの女、祖父の凶面を持っていたな！ そしてあの頃龍零式改そつくりの鎧武者型アクターを作り上げた。あれが伝説の零式オリジナルか！」 「落ち着いて。まもなくです。シナリオどおりに」「わかった。この話題は終わつてからだ。」

その傍らで音響ブースの傍に座つていた荏田は二人のや

り取りにニヤついていた。

「あの社長らしくないな。動搖している。どう思うかね城間さん」

「確かに。社長らしくないですね」

貴子は笑つて同意した。

一緒に半日を荏田の話し相手をしていた城間はこの男の物怖じしない堂々とした物言いに次第に魅かれていた。彼には会社人間にはいらないタイプの独立した男の魅力があつた。

「あの男のような肝つ玉の小さい完璧主義者はささいなハブニングさえ事件に感じられる」

ファンファーレとともに開会が宣言され、専務から開会の挨拶が終わつたあと、昨日のイヒカの活躍が映された大型モニターの前に兼光真は登場した。

「マコト！ カネミツ！ マコト！ カネミツ！」

ファンの若い男女の声援は鳴り止まなかつた。

壇上の兼光は右手にマイクを持ち、左手で画面を指差しながら全世界のファンが待ちのぞんだオンステージが始まつた。

「昨日の僕の活躍を確認した人は多いと思う。機動性能こそ未来への可能性。世界の産業構造を変えるのだ。リザー

ドマンシリーズは次世代機へのプロトタイプ零号として後世に語り継がれる。深海から高空まで、自由な運動性能を保つたまま行動できるのだ

「社長いいぞ！」ファン達の声援は会場に響いた。

舞台袖の桐江はため息をついた。

駄目駄目ね。セリフはいい、でもいつもの勢いが足りないわ。葦原茂敏の遺産がここにあるとは。

百名のボーッマス6ナポレオンは工場から150日的位置で沈黙を守っていた。

「みずきは力を使っているとはいえ、もう10分もこの状態だ。裕一大丈夫か？」もうすぐ奴に回線繋がる

裕一は透明のウオードパネルを見た。水に広がる波紋のような同心円が広がっていた。

「ああ、みずきの思念が壁を作っている。敵にはきついだろうな。おーいみずき、大丈夫か？」

砂浜のみずきはナポレオンに指さしたままインカムで答えた。

「向こうもわざかながら力の波を感じる。まだ力は使っていない」

「え？」

「敵の能力者が現れたということ」

「ちくしょう。アクセルが踏めない。なんなんだよ。これが『巫女の力』というやつか？」

ボーッマス6ヘナポレオンの二人乗りコクピットに派手な配色のパイロットスーツとノーヘルメットの男たちがいた。

「あのねえちゃんは只者じゃねえ。だが戦いを知らない能

力者は雑魚にひとしい」

「柏木さん、さすが。能力者狩りのエキスパート」

長髪の男に柏木と呼ばれたアフロヘアにゴーグルの男は腕組みをしたままだった。

「納得してんじやねえ。現状負けてるんだよ、この数分間俺の作戦を考えあぐねさせやがって」

「しかし柏木さん、いくつ仕事掛け持ちしてるんですか？」

ワンワールドの指令はあの工場の中から新型アクチュエーターを奪うこと。匿名のクライアントから葦原みずきを指定海域まで連れ出せ、それからこの機械の保守点検。他いろいろあるでしょ、わけわかんねえすよ」

柏木は後ろを振り向きざま田中の喉にダガーナイフを向けた。

「俺の指示通りだけ動け、田中。貴様は『ハイエスト』からの指令を知る立場にはない」

「ね、わかりました隊長」

「荏田の馬鹿野郎が桐丸に捕まつたんだ。元自衛官の工作員の評価がかからつて」

「それにしてもなんでわかつてるのでどうしてアクセル踏めないんでしょう。柏木さんお願ひしますよ」

「何度もおなじこと言うな。俺にまかせろ」

その時コクピットの内部スピーカーにノイズが入つて、ライフケンカスマラの電源が勝手に入り、モニターのウインドウが一つ開いた。

「……合法的通信コードスキャンを使わずにいきなりハッキングかよ。上等じゃないか」

カメラの前の比嘉辰巳はナポレオンの乗組員に対してメッセージを送つた。

「ここは八幡アクリュエーター重機の工場、私はシステムコーディネーターの比嘉と申します。我々は桐丸の下請けではない独立した零細企業だ。ワンワールドの要求はなにか？ 通信回線をハックしたように我々にはウイルスを送り込むこともできる実力を備えている。穩便に問題を解決したい。どうですか」

モニター上の柏木は腕組みを外して答えた。

「こつちこそ二次送信不可の信号を送つた。俺の顔をネツ

トでさらし首にすることはできないぞ。さてハッカーさん

よ、ワンワールドっつうか俺達の要求はそちらにある大型アクチュエーターと、今表にでている葦原みづきつて娘だ。桐丸商事常務のお嬢さんをお借りする。抵抗しなければそれ以上の被害は無いぜ。どうするかね」

工場の面々は背筋が凍る思いがした。

「お借りするつて人さらいじやねえか。それは困る……。

そんな要求は……！」

「考え方むなよ。そしたら勝手にやらせてもらうぜ」

モニターは切れた。

「あーなんですよ。向こうから閉じたみたいで比嘉さん」

小夜子はキーボードを叩いたがハッキングした通信回線は開かなかつた。通常の通信コードの文字列を打ち込んで呼びかけたが応答は無かつた。

裕一は表に飛び出してみずきの肩を強く驚づかみにした。

「みづき、中に入れ、技を使うよりお前が狙われている」

「駄目。あの人たちは口ほどたいした気合を感じないわ」

「もうすぐ警察が来る。お前の仕事は終わりだ」

みづきは振り返つていつた。

「どこまで私が本物の神官なのか試させて。これが私のブ

ライドかもしれない。だから」

「元のみずきに戻れよ！ 神官とか忘れる。お前は普通の

女の子だろ」

みずきは振り返り、強いまなざしで裕一を睨んだ。

「ゴーレスを作ると決めた時から神様からもらつたこの力を大切にしたいって思つてたんだから！ 舜も裕一もゴーレスに命を分けてるんでしょ。もう後戻りはできない。そうでしょ？」

ここしばらく冷静なみずきばかりを見ていた裕一は、これが本音だと悟った。

俺達は引き返せない。神の力を使つていいのだから。その結果が敵の襲来なのだ。

裕一は黙つて工場に戻つて、目の前のゴーレスに向かつて指示を出した。

「舜、聞いているか？ ゴーレスを立たせよう。立たせる

だけだよ。立つだけで威嚇になる心理戦だ」

コクピットの舜は震えていた。悪意を持つた敵の存在に恐怖を感じていた。

僕は何をすればいいのか、何ができるのか。

「おい舜、答えて？」

「うん。わかった」

「気のない返事だな。ダイブイン！ だぜ」

「うん、準備する」

龍の目を正面に置いて、左手をシャーレの上に置き、気持ちを整えた。

「落ち着いて気持ちを落ち着けて、落ち着いて気持ちを落ち着けて……」

脳波接続は80%を前後の値で留まり100%には届かなかつた。裕一は舜に怒鳴つた。

「えー舜、みずきががんばってるばーよ。やーの気持ちはどうなんか」

みずきの本音を聞いた裕一はなおさら舜に本気になつて欲しいと思つた。

「今は気持ちがなんか落ち着かなくて。まつて、一分間。深呼吸するから」

「落ち着け、そして答えをだせ。」

舜は考えた。敵はゴーレスとみずきを狙つてゐる。ゴーレスとみずき。大切なのはみずき。でもこの一步が踏み出せない。これなんだ。一步超える気持ちが。あれ、僕は前に進めない。なんですよ。

インカムではなく心の中にみずきの声が聞こえた。

♪氣持ちが繋がつたね。舜。同じ事を考えたから繋がつたんだよね。いま敵にかけているクナトの術をあなたは敏感に感じて先に進めなくなっている。少し術を弱くするから、ゴーレスを立たせて♪

♪あの術が僕にも効いている? ならなおさら僕はみずきの術を無視してやりとげなければならない♪

♪舜がわたしの心の動きに敏感なのはわかる。それならば逆に私がクナトの術弱くする瞬間をつかんで。君ならわかる♪

♪わかる。君の心の動きをつかんでみる♪

♪私は神官の仕事をする。あなたたは王の仕事をして♪

♪わかった。……僕は……君を……守る♪

♪最後の言葉だけが彼女に通じたのかあやふやだった。

クナトの術が弱くなるのを感じた。顔に当たる風が弱くなるような感覚。

「まだ! ゴーレス! ダイブイン!」

パラメーターが100%を超えて、接続ツリー表示が数百

百の分岐が青を示しゴーサインを示した。

舜は駆動アクチュエーター接続をONにして、ブレーキを解除した。

「上運天舜、ゴーレス発進します」

ゴーレスはゆっくりと膝を立てて起き上がった。  
シャツツァーが開かれ、工場にビーチの日光が差し込んできた。

ゴーレスの放出した蒸気が室内に広がっていくことが皆の目に明らかだつた。  
「小雪ちゃん……ゴーレスのエンジンはまさか蒸気?」  
「そう、電気とのハイブリッド。そして葦原茂敏の設計図通りの部分。八幡幸賢が作り上げたエンジン。オジーのおかげね」

海岸線に並行に南側の波打ち際にいるナポレオンとゴーレスは対峙した。外部スピーカーから舜は叫んだ。

「おい! ナポレオンこれ以上近づくな! みずきには近づくなよ!」

みずきはゴーレスを見上げて少しづつ引き下がって工場に入ろうとしたとき、海に円形の影が浮かび上がり、それは素早く、ゴーレスとみずきの間に立ちはだかつた。

「みずき!」

舜は目の前に現れたのが円形アクチュエーター機であることに気がついた。

「氣を弱めたのが甘いな。俺がこのチャンスを見逃すわけ

がない。『波』は見えてるんだよ。無生物のパウンドタートルにはこの技はきかねえよ』

柏木は直径23cmの円盤に六本足が生えたアクチュエータ、パウンドタートルを遠隔操作した。

みずきは不気味な円盤に押されてじりじりとナポレオンの側に近寄つていった。

「あの円盤を捕まえる！」

ゴーレスの腕を伸ばしてパウンドタートルを捕まえようしたが、左右に素早く動いた。

「きやつ！」

みずきにパウンドタートルの砂埃がかかった。

「舜、やめろ。みずきにもしものことがあつたら」「ちくしょう。早すぎる！」

「妹になにすんの！」

小雪は飛び出したが近づけなかつた。

パウンドタートルは六本の足をせわしく動かし、白い砂浜をかき乱し砂埃を巻き上げながら進んでいった。

舜は何も出来なかつた。そしてこの工場の面々は有効な手立てを思いつかなかつた。みずきはナポレオンの方へと追いかけて立たれられた。

浦添埠頭の新作発表会では兼光社長のトークを終えて、いよいよザードマンの実演起動パフォーマンスを始めるためにインターバルを置いた時であつた。

トークの途中から一般参加者が携帯で画像を見る姿が目立ち兼光は焦りを感じていたが、報道の画像を舞台袖で先ほどよりもさらに衝撃的な映像を見ることになった。

百名の海岸沿いに現れたボーツマス6とゴーレス、狙われる女の子の静止画像。みずきの顔にぼかしを入れているが、百名のメンバーのSOSを世界中が確認している状態だ。

「これはまずいね。自衛隊は何をしているかね。うーん」

舞台袖で企画スタッフと画像を確認し兼光は頭を搔いていた。

「柏木の部隊か！ ワンワールドは人には危害を与えないのがモットーだろうが。これは他の団体のミッションだろ。戦争屋が」

佐田はモニターを覗き込んで怒りをあらわにした。

「さすがに助けたくても泳いでいくわけにはいかないしね」

「あんたとほけるなよ、あのコンテナ、橋製作所のヘリアクチュエーターなんだろ。あれをリザードマンに取り付け

て飛んでいけないのか？」

「なるほど。ヘリアクチュエーターがあつたとしても使えないですよ。自衛隊への配備で県議会が紛糾しているものがここにあるわけないじゃないですか。まつとうな商売や算なんだろう。正義ではないんだな！」

荏田は音響ブースからシールド線を引き抜き、傍らにいた城間貴子の首に巻きつけた。SPの3人の男も止めに入れないとスピードだった。

「おい！ 秘書を人質に取つたぜ。リザードマンをよこしな！」

「社長！ 助けて！」

「おやおや、犯罪者に逆戻り。実刑は免れませんよ。いまなら冗談で終わることだ。君を社員にしたい気持ちは変わらないよ。やめなさい」

「うるせえ、俺があんたの言う法律や世論の壁を越えようとしているんだ。わかるだろ」

「……わかりました。あなたの言うとおりにSG-11-3をお貸ししましょう」

「社長…？」

貴子は涙目だった。

「君を助けてます。今はおとなしくしていなさい」

「そんなあ」

兼光は荏田に認証カードを投げて渡し、受け取った荏田はシールド線を鞭のよう振り回しながらSPや周りの関係者を退けながら舞台右手の青緑色のリザードマンに搭乗した。

コタピット後部補助席に貴子を座らせると荏田は謝った。

「本当にすまない貴子さん」

「途中から演技とわかりました。あの女の子を助けに行くんでしょ」

「ああ、それまで人質役になつてくれ」

「わかりました。協力します。もう、本当に怖かつたんですよ」

わざとむすつとした顔の貴子の顔に荏田は思わず笑つてしまつた。

「ははは、いくぜ、貴子ちゃん。揺れるからな」

起動したリザードマンは港のコンテナの一つをこじ開けて、ヘリアクチュエーターを取り出してリザードマンの両肩に装着した。左右二つの装着したヘリのプロペラが回転

を始めた。

「やっぱりプログラム同期接続が容易だ。工業用のくせに軍用に転用する気みえみえなんだよ。飛ぶぜ、揺れるぞ」

貴子は少し笑つた。

ローターの爆音とともに飛び上がるリザードマン。メカニニアの多い観客はこのハピニングにフラッシュの嵐と歓声を上げた。

しかし大多数の県内世論で使用を反対されていたヘリアクチュエーターが見つかってしまったことは兼光にとって痛手だった。世論を味方にするため兼光は新たな策を練りだした。

「桐江ちゃん、防衛省備品の使用申請、簡略でね。太田くん、これから私のショーでお客様をひきとめて頂戴」

「社長まさか」

「そう、人質にとられた社員を助けに行く社長。誰か文句ある」

皆無言でうなづくしかなかつた。

桂田に感謝しててるでしょ、と桐江は兼光の心中を読んだ。万能だが単純でわかりやすい男。かわいらしい人ね

....。

アクチュエーター機の自立飛行を可能にさせるヘリアク

「もう、警察遅い！」

チュエーター橋 HA-3 カワセミは尾翼ローターを伸ばして

ジエットエンジンを起動し、水平加速飛行状態になつた。

桂田と貴子は下界を見下ろす360度モニターの眺めに見入つてしまつていた。

「すごいマシンなのはわかるが、揺れないな。いや、止まつているようだ。君はこの振動緩衝系のシステムを知つているか？」

貴子は秘書としての知識を披露した。

「このコクピットは新開発のゼリー状液に浮いた状態なのです。相対的にコクピット部が動いていない状態に液体が動くのです。意志を持つかのように」

「そこまで完璧に振動を相殺するのか」

「桐丸重工の次世代テクノロジーの一つです。物理法則の限界への挑戦です」

「限界こえたんじゃねえのか。なんかそんな気がするな」

暴走族のアクチュエーター拘束用ワイヤーガンを搭載した体高2・5mの鳥型小型二足歩行機『クイナ』3台を乗せた専用トラックとパトカーが到着した。小夜子が警察に食つてかかつた。

「君達勝手に外にでるから変なマシンにつかまるんだろうが。何、あのヨロイのでかいのは？」

制服の警官が怒鳴った。

「それより早く捕まえてよー」

捜査課の刑事が出てきた。

「県警本部から応援が来る。それまで牽制をかける」

制服組が反論した。

「警部補、待って」

「ぬーが（なに）待ってえー？ 犯罪を抑止するのが警察の仕事やしが！」

「えー！ 和宇慶（わうけ）さん、わつたー機動隊あらん

しが。（俺たちや機動隊じやねえ）」

「えー、へーくなー（早く）クイナ乗つて」

クイナ3台は防風林の間からナポレオンとバウンドタートルの間に現れた、みずきがナポレオンに近づくのを阻止する計画だった。

南城署捜査課警部補の和宇慶はスピーカーを最大にして言つた。

「あなた方は包囲されている。無駄な抵抗はやめなさい。人質を解放しなさい」

ダダダダダダ！ ナポレオンの下腹部ハツチの奥に銃座

に座った田中が12.6mm重機関銃を発射した。

みずきは身をかがめた。そして2台のクイナの脚部第三関節に着弾した弾丸はクイナの直立機能にダメージを与え、2台は横に倒れて1台は退却した。

田中は拳銃を片手に昇降ワイヤーで降下し、みずきの前

に立つた。

「お嬢様、お迎えに参りました」

右手で銃を突きつけながら差し伸べた田中の左手をみずきは激しく叩いた。

「私が人質になることは敗北ではないわ」

田中はみずきの手首をぐいとひっぱつた。

早くしなければ！ 早くしなければ！

その時舜の意識に大量の情報が入つてきた。半径数キロの全ての存在の全ての形。大地の記憶だ。

わかる。僕の意識のままにゴーレスが動くのを。

あいつに牽制をかける武器。あれを取りにいこう。

そのイメージのままにゴーレスが動いたのはすべて一瞬のことだったが、しかし彼は自分の体が高速移動にさらされているのを実感できなかつた。

ゴーレスの蒸気加圧メーターが瞬間振り切れたのを裕一達は確認した。そしてどこにゴーレスがいるのか誰にも見

えなかつた。

「裕一！ 問題の瞬間から十—50秒のドキュメントを保  
存しろ！ これはゴーレスの潜在スペックにちがいな  
い！」

辰巳は叫んだ。

「暴走する舜がゴーレスの力をついに發揮かよ……。変な  
ことするなよ、舜」

百名にたどり着いたリザードマンは上空から降下状態だ  
った。荏田たちはゴーレスが波の筋に消えて行く姿を確認  
した。

「あのヨロイのやつ加速してどこに消えた！」

「荏田さん。あれ、まるで忍者みたいです……」

田中がみずきをナポレオンに乗せようとした時、みずき  
の頭に水しぶきが落ちてきた。ナポレオンにモズク養殖の  
網が四本の腕部に絡み付いていた。

「これ以上悪さをするな。みずきを返せ！」  
ゴーレスはブイの付いた網を振り回していた。

外部スピーカーが彼の声を海岸に響かせた。

「何時あいつは気配を消した？ とりあえず反撃するぜ」  
ナボレオンの頭部のワイヤーガンが発射された。ゴーレ

スの手首に重りが回転しワイヤーが絡みつき、網を投てき  
することができなくなつた。

「やられた！ ……み、みずき!! つれて行くな！」

ゴーレスの動きが止まつた瞬間を見計らつて、みずきは  
田中にひっぱられてナポレオンのコクピットに入つていっ  
た。

「さあ、ヨロイファイターさんよ。姫を助けたきや、俺を  
壊すことだな。手始めにバウンドタートルがお前の相手

だ」

ゴーレスの足に取り付いて内蔵していたチエンソーを出  
したタートルは関節アクチュエーターの切断にとりかかつ  
ていた。

「離れろ！ この虫けら」

ゴーレスの足をばたつかせてみたものの離れる気配は無か  
つた。

「ざまあみろ、アキレス腱を切られちまえ。立てないアク  
チユエーターやはクズ鉄同然だ」

「柏木さん、一端退却しますか」

「ああ、たしかにオプス1・5に移行したいがバツクアッ  
ブから連絡あるまでオプス1・2を遂行だ。ヨロイを活動

不能にする」

舜……。本当はあなたがゴーレスを動かせなかつたのは術のせいじやない。あなたのやる気、思いきりが少なかつただけ。だから術を弱めてあなたの隠されたやる気をだして欲しかつた。

君は思いきりをつけてゴーレスを戦いの場にだした。

そしてさつきの力は本物。ゴーレスと一体化した瞬間に

高速移動ができた。

本当のゴーレスの力を見せてほしい。君ならできる。こ

こから助けてほしい。

みづきは舜の助けを待つた。

つづく